



Title	農業経営研究に於ける経済理論の役割
Author(s)	ヘデイー, T
Citation	季刊農業経営研究, 5, 4-6
Issue Date	1959-01-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36280
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_4-6.pdf



農業経営研究に於ける経済理論の役割

アイオワ大学教授 T ヘ デ イ ー

一

研究はその性格によつて基礎研究と応用研究に分けるとするならば、農業経営学は応用科学の範疇に属するものである。したがつて経営学の基礎とも言うべき理論の正しい理解と正しい応用は経営学並に実際農業経営の発展に極めて重要な意義を持つものである。

アメリカに於ける初期の農業経営には経済学原論のようなはつきりした体系と言うものはなく、きわめて大雑把な概念と経験を基礎としていた。したがつてそこで取扱はれていた農業経営はおのずから素朴であり、又実際に対する貢献も十分でなかつた。

最近はその理論も次第に体系化されると共にもつと経験的に深く検討し、又実際的な理論をその中にうち樹てて行くと言ふような段階に進んで来ている。

二

農業経営学並に農業経済学の研究は次のごとく分類することが出来ると思う。

その第一は歴史的研究である。

この研究は経営現象を歴史的に描写することであつて、必ずしも経済理論を必要とするものでない。歴史家が介入するは勿論、経済学者も参加出来る性質の分野である。

その第二は記載的研究である。

この研究は現実の経営事情をそのままはつきり「えがきだす」ことで、この分野においても経済学の理論、あるいは厳密な経済学体系は要請されない。しかし厳密な経済理論を持つことによつて現実の描写が論理的になることはたしかである。

その第三は一般的研究である。

この研究の目的は経済行動を決定するために行うもので、いいかえると選択の分野に関する研究である。ここでは経済学の理論を最も強く

要請する。どのような種類の理論、どのような性質の理論を、課題の解明に適用しなければならぬか、を要請する。

三

理論というものは事実を体系化するに役立つものであり、理論のたすけを借りることによつて事実を幾つかの範疇に分けることが出来るのである。このような範疇分けの必要が起るのは人間の智能には限界があるからである。即ち色々な事情が交錯した状態では問題の解明が非常に困難になる。そこで人間の智能でもつて処理出来るようにそれらの事実を範疇化し、体系化するわけである。これが理論の持つている機能であると考えへる。いいかえるならば理論というものはモデルを作り、あるいは仮説を設定するに役立つのでと考える。そうして理論がこのような機能を持つが故に、応用経済学たとえば農業経営の研究と云つたようなものにいろいろな理論を適用し、或はそれを理論的に検討することを可能ならしめるのである。

応用科学はすべてそうであるが、その基礎になるのは理論で基礎理論あるいは基礎法則というものが、モデルを作らしめあるいは仮説を設定せしめるに役立つのである。それに依てはじめて現実の問題、実際的な問題の解明が可能となるのである。それ故に応用科学に於ける理論というものは、その分野に於ける正しい像を想定せしめるところのもので、これを基礎として色々な現象のモデルだとか仮説を作らしめ仮説に依つて色々な現象の間の関係を明らかにしめるのである。

経済理論をさらに厳密に云うと、それはある問題に関連のある貨幣要素というものを設定するものである。即ち連続的な経済価値の投入によつて量的な変化を予想せしめるという役割をする。したがつて理論というものは結局、特定

化の為の方法論とも云うべきこととなる。

どんな人でも科学的に行動することが出来るし、又科学的に考へることも出来るのであるが、それは要するに論理的であると云うのであつて論理的に考へ、論理的に行動するということが、その物事のあるいは行動の科学的と云う事情を形ち作るのである。

四

研究の方法は決して、ある特定の方法に限られたものではないが、しかし又その方法が違つても互に関係をもっているものである。

普通の区別にしがえは演繹的と帰納的方法である。演繹的方法は非常に重要でこの方法に従う研究者を選ぶ場合においては非常に慎重を期さなければならない。すなわち、この方法に従う研究者は創像力に富んだ人であると共に、その他色々な適当な方法を特殊な問題に応用することの出来る能力をもつものでなければならない。一方帰納法の研究を選ぶ場合には前者よりも学問的な活動能力がそれ程大きく要請されないと自分は考へている。しかし実際に非常に良く仕事をする研究者というものは、以上に述べた或る一つの方法に従っているのではなく演繹的な方法あるいは、機能的な方法の両者を適切につかつているのである。

経済学の理論というものは通俗的に云うと研究を進めるときに利用する方法論を貯へた一つの蔵あるいは色々な仮設の蔵みたいなものと考へて良いと思う。

このことに關聯して私は二つの方法を例を挙げて説明したいと思う。一つの方法は理論をなにも持たない人が色々な研究をしようとする場合と他の一つの場合は既に理論をもっている研究者の場合である。言うまでもなく前者は現象としてしか理解出来ないのに対し、後者は現象分析に対し或る仮設を設定して研究に着手するのである。前者は盲目的であるのに対し後者はその現象の中にどういふ問題があるのか、それに対しどういふ種類の事実を集めねばならないか。どのような分析方法を採用するかということを目ざから明らかにするのである。結果としてその両者が非常に大きな差を示すことになるのは極めて当然のことである。

具体的な例を示してみるに、日本の農家を見て来たのであるが農家の問題としては動力源として牛を使うか、馬を使うか、あるいはトラクターを使うか、あるいは人で行うか、と云つた選択の問題にぶつかることと思うのであるが、

はじめには理論もなにも必要でない普通の農家の場合であります、どちらが費用が安くつくか、つまり牛の方が良いか、トラクターの方が良いかと云つた様なことにこの問題がなるのである、この様な問題に私が簡単に答えようとするには理論もなにもいらないので、反当の費用が牛を使つた方がどれだけかかる、トラクターを使つた方がどれだけかかると云つた様なことをここで調べて、そして予想すれば良いということになる。そこで経験的な方法で研究をこの様な問題のたて方で進めようとするれば、その標本の取り方は結局、牛を使つている農家、トラクターを使つている農家と云うようにランダムなサンプルに従へば良いということになる。

そこで次の研究作業であるが、それは結局平均費用を算出すれば良い訳である。色々な各農家に依つての偏差があるが、その偏差をうまく処理し平均費用を出して行けば良いと云う様に進んで行くのである。たとえば私が両方を試みた結果、牛を使つたら反当 1,800 円、トラクターを使へば 1,500 円済んだとすると牛の方が高いと云うことにならう。この様にすると非常に能率的に計算がされる訳であつて、これを正確に又しつかりやればこれでこの研究は立派なものに一応はなる訳である。

次に理論あるいはモデル、あるいは簡単な経済学の仮設を利用しこれと同じ問題をやる別な方法がある。即ちそれは理論が先にあつてその理論にもとづく実験的な方法が明らかにされ、次いで具体的なサンプルを色々と分析し、而して自分の理論をはつきりたしかめるのである。このように始めから実際にぶつかつて、そこから何か引き出すというのではなく、最初は頭の中に理論的に想像をし、これに依つて仮設を作り、然る後分析を進めるという方法である。従来私の採用している方法は実はこれなのである。以上の問題を解明する為に理論の助けを借りて今、標本を採用し分析すると規模の差異に

依つてトラクターの場合は大きくなるに従い下つてくるし、牛の場合にはあまり下らないと結果が出て来る。前の方の方法をやればトラクターを使へば安いという一つの答へしか出て来ない、ところが理論に依つてしたがうと決してそうはならず、面積が大きくなつて来れば、トラクターの方を使へば費用が安くて済むが、しかし面積が小さい場合には逆に牛を使つた方が安いということがはつきり出て来るのである。

皆が私からもつと深いものを求められたかもしれませんが、ここを出したのは極めて簡単な例で恐縮ですが、極めて簡単なものに於ても理論というものがある。どう農業経営あるいは農業経済学に利用され用いることが出来るかはつきり説明することが出来たと思う。

収穫量の大小と農家の利益の大小と云つたことが、だいたい同じだと云つたことを昔の農業経済学者が云つていたが、これも既に出来上つている理論即ち生産可能曲線あるいは肥料の生産函数といった方法を用い検討すると、更に多角的に解明される。これは農業経営学ばかりでなく、農業経済学のあらゆる分野に云うことが出来ることで、たとえば需要の分野に於ても色

々な変数を使つて一人当りの消費量を求めて行くことが出来るが、その貨幣要素の中には色々と分析に困難なものがある。しかしそれらが、よりよく解明されない理由としては理論が完全無欠の完成されたものでないことに起因する。問題の分野も沢山ある訳でそこに行くと農業経済学者は自分の農業経済あるいは農業経営者、何れの場合もそうであるが特に農業経営学における理論はもつと整理且進化させて一つの分析を通じて関連する要素と同時につきりつかむ様な研究を進めて行かなければならないと考へる。

(この稿は本年7月10日から8月16日に到る38日間、北海道大学農学部農業経済学教室を会場として開設された「日米農業経営研究所」に特別講師として来所したアイオワ大学教授の特別講演の一部である。ヘディ教授は新しいアイデアによつて生産経済学を体系化された世界的な農業経済者の一人である。これに関する業績は極めて多く又優秀な弟子を養成した。この稿は7月25日の講演の要旨を取纏めたものである。(文責桃野助教授)

フリートリツヒ・エーレポー原著 帯広畜産大学教授 工藤 元 訳

農業経営学汎論

本邦初訳

—農業家・政治家・官吏・学生のための教科書—

好評発売中

・上巻 350円

・下巻 350円

上下合本

(特製総クロス箱入ビニールカバー付) 1,300円

A5版・250頁

上製本

上・下 700円

特製本

本書は、世界の農業経営界に重要な地位をしめるフリートリツヒ・エーレポーの主著「農業経営学汎論」の全訳であり、農業経営学界に近代的発展の転機をもたらした、エーレポーの偉大な業績こそは、正に本書によつてその全貌を遺憾なく見る事が出来るであろう。本書を読まずして、農業経営及び農業経営学を論ずることは不可能である。

本書は、元来学術論文ではなく、むしろ実家向の参考書であり、学問のための学問でなく、実際は農業を経営した経験の上に立つ世界的な学問であり、その平易な文章と共に世界各国で出版され、日本において、これほどまでに、出版をまたれた農業書はない。

—公論社刊行—